

飯山市

佃 遺跡

—城山団地造成に伴う緊急試掘調査報告書—

1987・3

飯山市教育委員会
飯山市土地開発公社

例　　言

1. 本書は、飯山市大字常郷字白山地籍に所在する佃遺跡の緊急試掘調査報告書である。
2. 調査は、飯山市土地開発公社による住宅団地造成に伴い、依頼を受けた飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。
3. 試掘調査は、昭和61年6月6日・9日の2日間実施した。
4. 調査に伴う関係者は、以下のとおりである。

調査担当者 高橋桂（県立飯山南高等学校教諭）

望月静雄

参加者 常盤井智行

" 柳雪子

" 柳孝子

" 木原二三子

" 伊東範夫

協力者 上村建設

飯山市教育委員会事務局関係者

浦野昌夫（教育長） 武田作之助（教育次長） 小川恵一（社会教育係長） 望月静雄
社会教育係)

土地開発公社事務局関係者

服部栄八郎（局長） 市川和夫（次長） 町井和夫（主査） 月岡寿男（職員）

5. 本書の執筆及び編集は、飯山市教育委員会事務局員 望月が行った。

1. 遺跡概觀

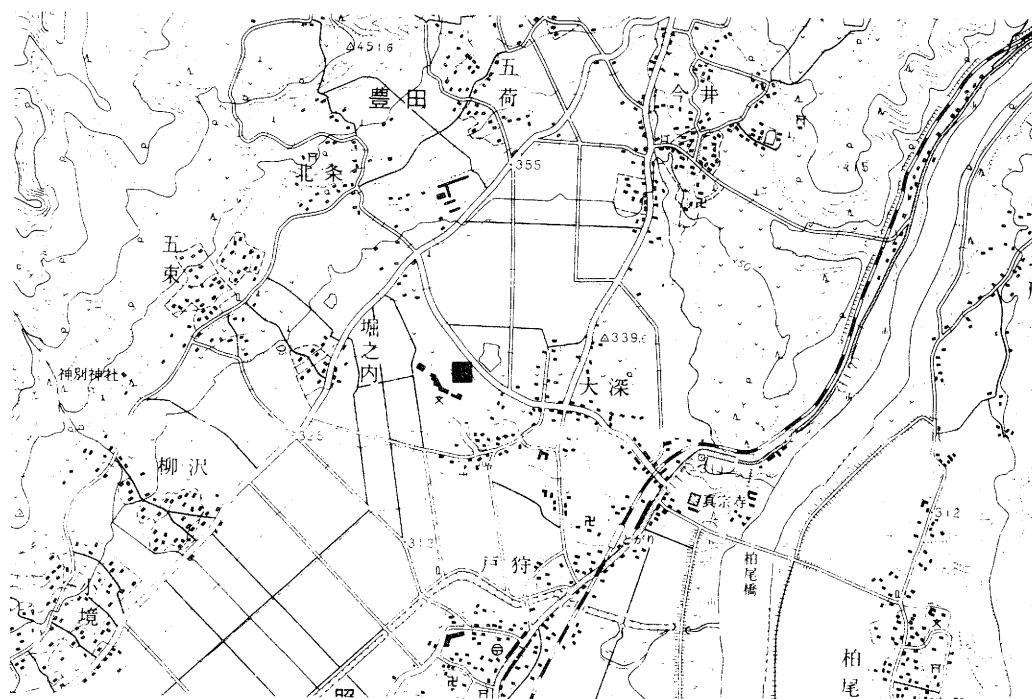
佃遺跡は、飯山盆地の北端、飯山市大深地区に所在する。

西方及び南方に所謂「水内の海」と呼称される広範な水田地帯を俯瞰する蟹沢川形成の押出面上にあり、地勢上質好な環境に位置している。

この環境の良さは、現在に限らず先史・古代・中世にあっても同様で、縄文・弥生・古墳時代及び平安時代にかかる遺物の出土が既に知られており、また、中世から近世にかけては城館が営まれている。本遺跡西北に位置している小丘がそれで、本遺跡の位置する白山・佃の地名もそれを物語っている。白山はしろやまと呼称し「城」を意味し、佃は「作り田」で中世領主の直轄田の意である。（註1）。

ところで、水田地帯に臨む押出面を仔細にみると、西縁には断切があって微高な小丘が一、二枚の水田を置いて連なるという複雑な地貌を呈しねている。そして、それら小丘の大部分とそれに接する水田地帯からは遺物の出土が知られており、昭和49年度実施の圃場整備事業においても弥生式土器・土師器の発見があった。

また昭和51年には、戸狩小学校建設に伴い発掘調査を実施している（飯山市教育委員会 1979）このときは、約140m² を調査したが、遺構等は発見されず僅か磨耗した土師器片1点を得たのみ



第1図 佃遺跡位置図(1:25000)

であった。

今回の調査個所は前回調査地点の北側に位置し、戸狩小学校の校舎と県道9-109号線に狭まれた微高地である。

2. 調査までの経過

佃遺跡は埋蔵文化財包蔵地として台帳に記載されている遺跡である。しかしながら、遺跡の中心地はもちろん範囲についてはほとんど明らかにされていない。これは、この付近が水田や原野であったためでもあるが、地形的要因すなわち押出面上に位置するために遺物が地中深く埋没しており、地表面上に現れることが少ないととも考えられる。そのため、土地開発公社からの照会について明確な対処が迫られた。このため昭和61年5月27日に高橋桂文化財専門委員に現地の視察を依頼した。該当地区において中世に属すると思われる土師器破片採集した。高橋委員よりグリットを設定して遺跡確認を行うよう指導を受けた。

このことにより、発掘調査を実施することとしたが、工事計画が迫っておりとりあえず市教育委員会事務局で確認調査を行い、調査結果によって改めて協議することとした。

註1 鏡味完二・鏡味明克（1977）「地名の語源」

引用・参考文献

桐原 健（1977）「佃遺跡調査報告」飯山市教育委員会

3. 調査

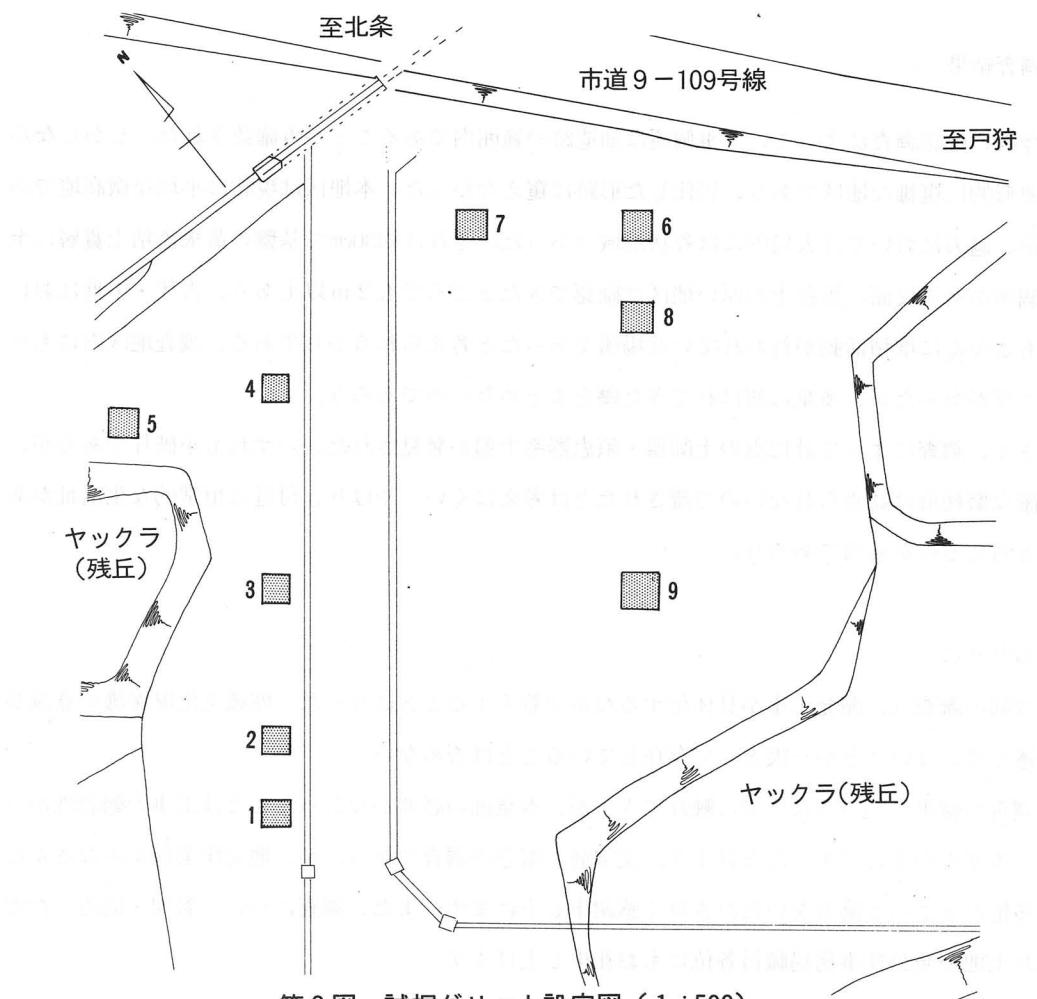
(1) 調査経過

調査は、昭和61年6月6日及び9日の2日間実施した。経過は以下のとおりである。

6月6日(金) 器材搬入後、試掘グリットを設定する。住宅造成に伴う道路新設工事、9-512号線)が着手され、その部分は土盛りがなされていた。そのため、試掘坑は任意に設定することとし、平面的・地形的に考慮しながら $2 \times 2\text{ m}$ グリットを9個所設けた(第2図)。

調査はNo.1グリットより着手した。須恵器系土器片が出土したが、黒色土が厚く約60cm掘り下げて基盤層まで調査することを断念した。続けてNo.2・3と調査したが、No.1と比較し黒色土の堆積は徐々に薄くなっている。No.3グリットでは75cmで基盤の黄褐色粘土質層に到達する。ただグリットの東側に向かって傾斜し、東壁面では、120cmを超える。

須恵器系土器及び土師器細片が出土しているが、明確に時代判定が可能な土器はない。



第2図 試掘グリット設定図 (1:500)

6月9日(月) 地元作業員の協力をいただきNo.4～9 グリットを調査する。

No.4～5は基盤層まで約5～60cmであり、比較的安定した地区である。やはり遺構は発見されず、土器細片が各1点採集されたにすぎない。No.6は表土が異常に硬く、色調も茶褐色を呈し黒色土層の堆積は認められなかった。攪乱を受けない明確な黄褐色粘土質層まで15cmであり、すでに削平された部分を耕作した個所であることが判明した。したがってこのグリット付近は残丘であったと思われる。

No.7は攪乱を受けており明確な堆積状況は不明であるが、No.3とは逆に西へ向かって傾斜しており、No.3とNo.7の間の南北ラインに凹地があると推定される。No.8・9グリットは基本的にはNo.1・2と同様であり、南に向かって急速に谷状地となるようである。

以上概観してきたが、平坦な微高地上と考えていた調査前の予想に違い、かなり複雑な地形であった。今回の調査で若干の遺物が採集されたけれども、遺構等は発見されず遺跡の中心地でないことが判明した。

(2)調査結果

今次の確認調査によって、工事個所は佃遺跡の範囲内であることが再確認された。しかしながら地形的に複雑な地域であり、居住した形跡は窺えなかった。本地區は現状は平坦な微高地であるが、過去においては大局的には谷状地域であった。それは約30cmで基盤の黄褐色粘土質層に至る個所がある反面、黒色土の厚い地区は確認できたところでも2m以上あり、古代・中世においてもさかんに堆積活動が行われていた場所であったと考えられるからである。調査地区内にもヤックラがあったが、多量に運ばれてきた礫をまとめたものであろう。

さて、調査によって計12点の土師器・須恵器系土器が発見された。いずれも小破片であるが、明確な磨耗痕は認められないので流されたとは考えにくい。やはり、付近に恒常的な生活址があると考えるのが妥当であろう。

おわりに

今回の調査は、開発工事が具体化するなかで着手することになった。埋蔵文化財保護の意識が浸透していないことが一因として存在していることは否めない。

調査の結果についてはすでに触ってきたが、本発掘の必要がなかったことは工事の緊急性から見て不幸中の幸いであったと言よう。文字通り緊急の調査であったが、地元作業員のみなさんは多忙のところご協力をいただき厚く感謝申し上げます。また、調査について参加・協力いただいた土地開発公社事務局職員各位にもお礼申し上げます。

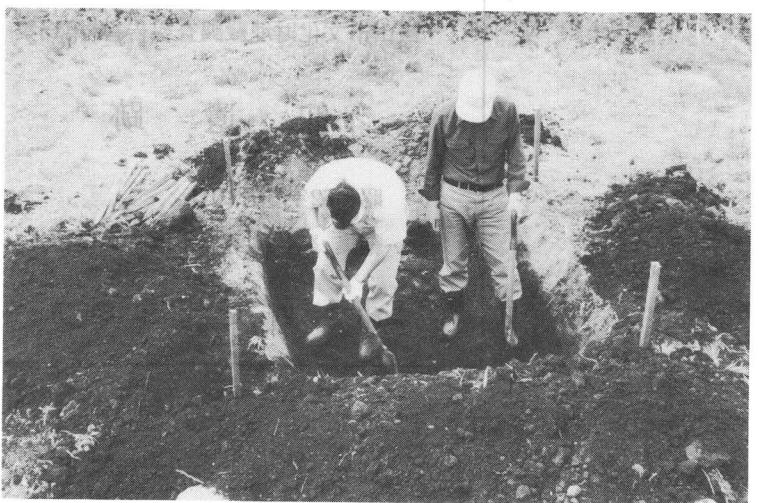
写真 1
調査区近景



写真 2
No. 1 グリット



写真 3
No. 3 グリット



飯山市文化財埋蔵調査報告書 第15集

佃 遺 跡

昭和62年3月10日

編集・発行 飯山市教育委員会

印 刷 足 立 印 刷 所

